

多様性のある集団の中で共に育ちあう教育・保育を考える ～クラスの中に特別な支援を必要とする子どもが複数いる場合～



発表者 遠藤 奈穂美 (聖テレジアこども園)
指導助言者 井口 妙子
(倉吉市子ども家庭課主任児童指導員)
司会者 古林 佳子 (聖テレジアこども園)
記録者 進木 結衣 (聖テレジアこども園)

1. 発表の概要

(1) 主題設定の理由

「・・・じぶんとちがうひととでも、おたがいのくふうやしっぱいやはっけんをおしえあったら、きっとみんな『へー！』ってなる。」(ヨシタケシンスケ作 伊藤亜紗そうだん『みえるとか みえないとか』(アリス館))

本園では近年、特別な支援を必要とする子どもが増えているように感じる。

しかし、園やクラス全体を見たときに、一人ひとりが全く違う個性やニーズを持って生活しており、特別な支援が必要な子どもだけではなく、目の前の子どもたち全てに安心できる場所をつくり、一人ひとりのよさを伸ばしていくことが大切であると考えた。

また、個の育ちに併せて「互いを理解し、認め合う」集団の育ちにも目を向けながら、園全体が共に育つ「共育」を目指して取り組んでいるところである。

(2) 取り組みについて

- A児についての様々な個別のアプローチ
- 全園児に対しての優しい園の保育環境づくり

(3) 実践例

○A児5歳 年長

～苦手さが見られる場面～

- ・ 食べること。“食への強いこだわり。”
- ・ 活動の“先”が見えないことに対する不安。
- ・ イレギュラーなスケジュールや、急な活動の変更に対する戸惑い。
- ・ 排便場所への不安。

～得意なところ・強み～

- ・ 文字に興味・関心がある。
- ・ 理解力が高く、物事を分析して考えたり、言葉でやり取りをしたりすることが得意。
- ・ “数”が好きで、計算をすることが得意。
- ・ 力いっぱい体を動かすことやゲームが好きで、意欲的に参加する。
- ・ 好きなキャラクターがある。

事例 エピソード① 安心できるトイレづくり

ある日、A児は園で、排便感からの腹痛でどうしても我慢ができなくて痛くて泣いていた。加配保育教諭とやりとりをしたがどうしても「トイレにはいきたくない」と訴えていた。“したいんだけど、園ではできない”と困っていたところに副園長通りかかり、「家のトイレはどんなトイレ?」「園のトイレとは違うんだよね」と、気持ちを受け止める言葉がけを行った。そしてA児の便意が少し収まった時に、A児の好きなマリオの話をして話題を変えた。「マリオがトイレにいたら安心できるんじゃない?」と、トイレにいたら安心するマリオと一緒に選んだ。園にトイレは2箇所あり、普段子どもたちが使わない静かなトイレを選び、“A児の家のトイレに限りなく近いトイレ”ということで、大人用の洋式トイレにA児と一緒にマリオを貼る高さを決めた。マリオがトイレにいることで「これならぼくできるよ」と安心した表情となり、A児が便意を感じた時はいつでもこのトイレを使用してもいいということにした。

理解力が高く、物事を分析して考えて相手に伝える力が“家庭と園とのトイレの違いを分析”し、“こういうトイレだったらぼくはできる”と言葉でやり取りをすることができた。このことが安心できるトイレへのイメージにつながりトイレづくりに繋がった。そして、A児がいつでもこのトイレを利用していいことやマリオを貼るまでのエピソードを全職員で共通理解し、連携をとるようにした。

5, A児について エピソード① 「ぼくのトイレ」

“得意なところ・強み”

理解力が高く
物事を分析して考えた
り
言葉でやり取りをする
ことが得意



“苦手さが見られる場面” 排便場所への不安

“安心できるトイレ”へのイメージ
キャラクターや貼る場所を
一緒に相談して決めて、トイレづくりをした

全職員との連携



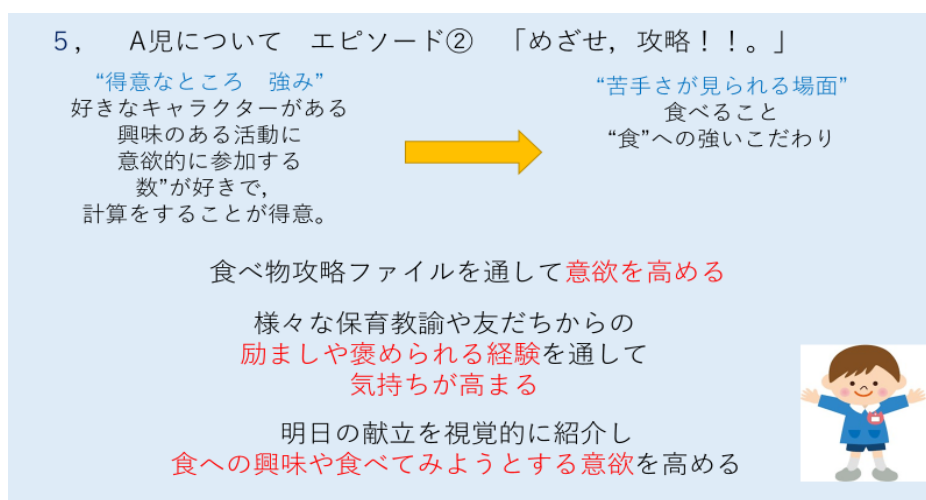
事例 エピソード② 食へのアプローチ

A児は3歳児年少組から入園したが、食へのこだわりが強く、3歳の時は白米しか食べることができなかった。「A児に楽しく安心して給食を食べてほしい」という思いから、年中組より、A児の“食へのこだわり”に対して、巡回訪問がきっかけとなり、倉吉市子ども家庭課井口主任児童指導員と家庭と園とで連携をして、A児への食に対する支援が始まった。A児のゲームが好き、ポイントアップが好き、ポイントの計算ができるという強みを生かす方法を取り入れてみようという提案をしてもらい、まずは様々な食材の香りを嗅いだり舐めたりして触れて親しむことからスタートをする「食べ物攻略ファイル ファーストステージ」が始まった。

“食べ物攻略ファイル ファーストステージ”は、食材ごとにページを製作し、なめる・ほんのちょっと食べる・ちょっと食べる・一口食べる…と、項目を設け、A児と加配保育教諭と食べた量がどれに当てはまるのか共通理解ができるようにした。そして、家庭と園とでなめた・または少し食べたなどの食品名を記入し、なめたら1ポイント、ちょっと食べたら3ポイントなど、見開きのページに今どれだけ食材ごとにポイントがたまっているのか視覚的に分かりやすくした。

そして食材ごとに慣れ親しんできた年長組より、A児の好きなゲームにちなんだポイントレベルアップ方式に支援もステップアップした。また、食べるということが体にとってどんな働きに繋がるのかを説明し“食べるということ”に意欲が持てるようにしたり、A児の得意なクイズにちなんで3色食品群クイズ・体への働きクイズ・なんの食材でしょうかクイズや食べた回数をポイントにした。さらに、在園児に配布している“給食の献立表”を利用し、園と家庭とで食べることができるようになった食品に印をつけて、毎日やりとりを行った。食後、話を聞いて共感しながら明日の献立を紹介し、明日の給食への具体的なイメージが持てるように、写真を使って事前にお知らせを行った。こうした支援を続けていく中で、ある日A児は少しずつ食べ物攻略ファイルに飽きてしまう。そこで加配保育教諭は“A児の得意なこと、強み”でもある“暗算”を新しく取り入れることにし、A児ともう一度一緒に攻略ファイルを確認し、初めて食べた食材には10ポイント、舐めるだけなら1ポイントと、ルールを明確にすることでA児が食べながら合計ポイントを暗算し食べることが楽しみになるような工夫を行った。するとA児は喜んで食べ物攻略ファイルに再挑戦し、得意の暗算でますますポイントを増やし、食材にも慣れレベルアップしていった。A児には食への強いこだわりがあったが、得意なところや強みを生かすことで食べ物攻略ファイルに繋がり、たくさんの友だちや先生たちに励まされたり褒められたりした経験を積み重ねることで食への興味や食べてみようとする意欲が高まった。

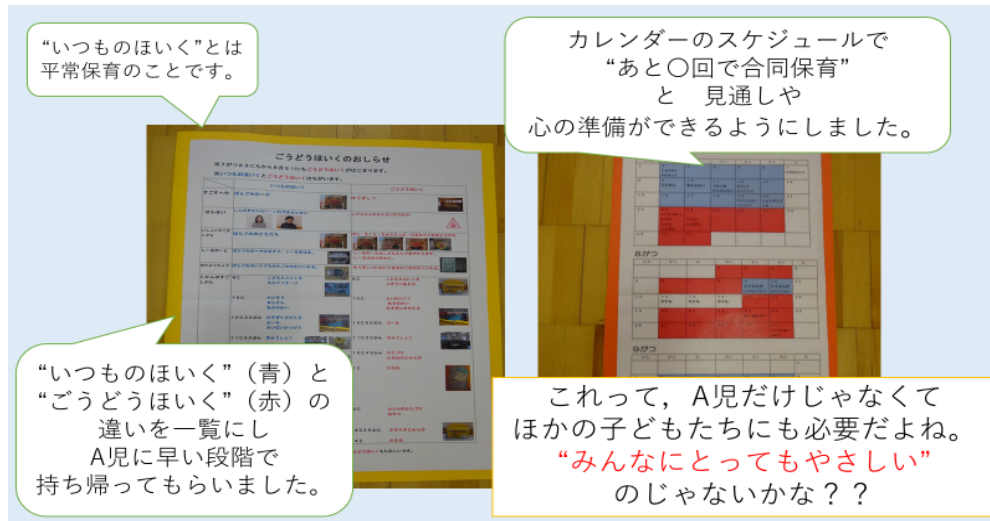
A児への関わりを通して、保育教諭の中で「これって他の子どもたちにとっても知りたい情報かもしれないね」という気づきが生まれた。



エピソード③ 夏季保育への不安

A児は活動の先が見えないことへの不安やイレギュラーなスケジュール、急な活動の変更が苦手だった。夏休みとなり夏季保育になると2歳児クラス～5歳児クラスは合同保育となるため、いつもと違う保育室、いつもと違う先生、いつもと違う一日の流れ、そしてA児の苦手な午睡もあり、A児にとっては夏季保育は不安が強かった。そこで子ども家庭課、園、家庭との支援会議の中で以下のポイントについて取り組みを行った。

- ・いつもの保育と合同保育とではどこが違うのかを明確にすること
- ・A児への不安解消
- ・夏休みの期間の明示

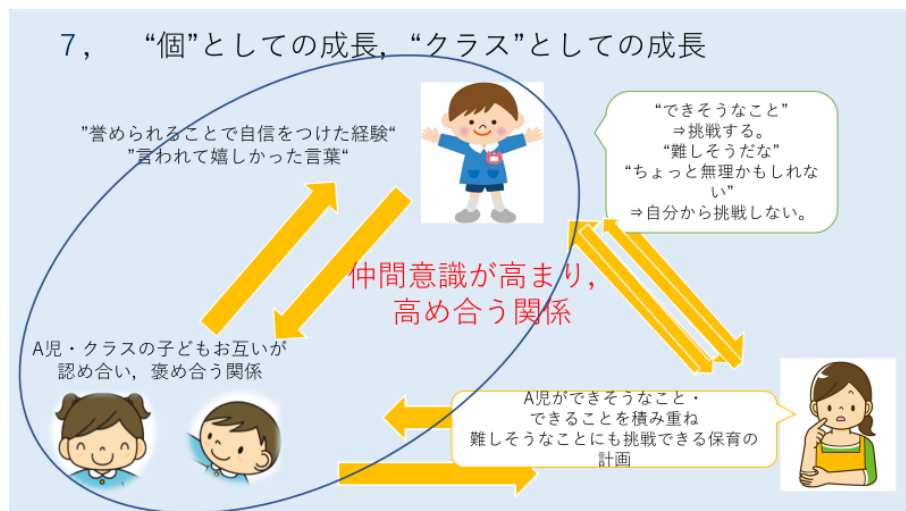


7月から9月までのカレンダーを用意し、夏休み期間を明確にしたものや、夏季保育の生活の流れを説明し、早くから家庭に持ち帰ってもらい家庭からも流れが確認できるようにした。そうすることで不安が強かった夏季保育もスムーズに過ごすことができた。

さらに、このことは、A児だけが知りたい情報ではなく、他の子どもたちも安心して登園できるためには必要な手立てなのではないかと職員一同考えるようになってきた。A児の成長を通して見えてきたもの“特別な支援は特別な支援が必要な子どもだけのもの”ではなく、“どの子どもたちにとっても安心につながり一人ひとりの良さや持っている力を発揮するために必要な情報”なのではないかと考えた。A児への支援を通して、A児のための支援教材ではなく、園全体が“みんなにとって優しい園づくり”に環境設定を見直そうという考え方に变化した。

○“個”としての成長，“クラス”としての成長

A児は自信がない活動は挑戦しないことが多く見られていた。加配教諭はA児の得意なことを生かしてスモールステップができるようにしたり、やる気になるような温かい言葉がけや具体的に褒めることにも取り組んだりした。こうした関わりを通して、A児は褒められて自信をつけたり言われて嬉しかった言葉を、困っている友だちに対して同じように関わろうとする姿が増えていった。それによって“A児”“クラスの子ども”のお互いが認め合い、褒め合う関係となり、A児は加配教諭との関係よりもクラスの友だちとの関係が楽しくなり、よほど困ったことがない限り友だちと一緒にやってみようと挑戦する姿が増えてきた。そして、クラスの仲間意識が高まり、高め合う関係へと発展していった。



(4) 結果と考察

A児の苦手さが見られる場面はいくつかあった。得意なところや強みなどを生かして有効だった手立てを継続し、ステップアップを目指した。それには、全職員がA児に対して共通理解を図ることやA児の家庭や医療、倉吉市や小学校など、関係機関との連携、そして子どもたちにとってモデルとなるような関わり方を全職員が取り組むことが大切ではないかと考えた。

(5) 今後の課題

今まで取り組んできた、

- ・全職員が子どもの特性を理解し、共通理解を図って連携をとること
- ・外部機関との密な連携を継続すること
- ・保護者との信頼関係を構築すること

をしっかりと継続していきたい。また、保育教諭が、子どもの発達や困り感を見取る視点を育てることで、一人ひとりの子どもが安心できる環境のもと、良さを伸ばし、互いを理解し認め合い、さらに園全体が共に育つ「共育」へと繋げていきたい。

2. 研究討議

○グループ討議

「多様性のある集団の中で 共に育ちあう教育・保育を考える」について、5つのグループに分かれてワークシートを記入し情報交換を行った。その後、グループごとに事例をピックアップし、課題点とそれに対する工夫やアイデアを紹介した。

活動参加が困難、こだわり、落ち着きのなさ、切り替えの困難さが気になるグループ

3歳児クラス 29名（個別の関わりを必要とする園児2名） 担任1名、担任補佐1名

B児（活動への参加が難しい、離室、感覚過敏）

C児（活動への参加が難しい、離室、落ち着きがない、切り替えが難しい、音楽が好き）

〔課題点〕

クラスの中に個別の関わりを必要とする園児が複数いる場合、担任の役割や担任補佐の先生の役割をどうしていったらいいのか。3歳児という年齢でまだまだ先生を頼りたい子も多く、担任としても一人ひとりを丁寧にみていきたいが、それが難しいのが現状。

〔工夫・アイデア〕

- ・クラスだけでなんとかしようとせず、園全体でみていく。
- ・いろいろな先生が声をかけ、助け合っていく。

人に対する暴力、活動参加が困難、コミュニケーション能力の欠落、場面緘黙が気になるグループ

話し合いの中で自閉症の子どもがあてはまる事例が多く出た。それぞれの子どもの様子やねらい、目的、友だちや先生との関わりも違ってくるが、1学期が終わったところでのどのような関わりをすると、その子にとって過ごしやすい環境なのか、日々模索しながら関わっている。

〔工夫・アイデア〕

- ・文字に興味がある子や数字にこだわりの強い子が多い。文字や数字をうまく支援に活用していく。

離席、落ち着きのなさ、活動参加が困難な姿が気になるグループ

3歳児 30名（個別の関わりを必要とする園児1名） 担任2名

D児（離席、衝動性、歌が好き、1対1の関わりや、やりとりができる）

〔課題点〕

D児個人としては、約束や習慣を身につけたい、短い時間座る、友だちとの簡単なコミュニケーションをとる。

クラスとしては、助け合えるクラス、一人ひとりの力が発揮できるクラス。

〔工夫、アイデア〕

強みや得意なことはそれぞれであるため、その子の強み、得意なことを生かしてその子にあった支援を行っていく。

言葉で伝えることが苦手なグループ

5歳児 21名（個別の関わりを必要とする園児4名） 担任1名、担任補佐1名

E児（活動参加が困難、離室、感覚過敏、落ち着きがない、言葉で伝えることが苦手、指示など耳から入ることが得意、大人への愛着がある）

〔課題点〕

就学に向けて、スケジュールなどを確認しながら見通しをもって安心して過ごせるようになってほしい。E児の思いや困ったところを自分の言葉で伝えるようになってほしい。気になることがあると、気になる物の方へ行ってしまう。

〔工夫、アイデア〕

クラスとして、

- ・月曜日から日曜日までのスケジュールを用意し、「今日はここ」とわかるようにする。
- ・1日のスケジュールをホワイトボードに示す。

E児個人として、

- ・席の配置を配慮する。
- ・ピアノの後ろに個別のスペースを設けることで安心できる場所を用意する。
- ・1日のスケジュールを文字と絵を使ってより具体的に示す。
- ・事前にお知らせや振り返り。

言葉の理解が苦手な

4歳児 21名（個別の関わりが必要な園児） 担任1名、加配保育教諭1名

F児（言葉の理解が難しい、好きなキャラクターがある）

〔課題点〕

1日のスケジュールに沿って安心して生活をしたり、活動の準備や移動など、身のまわりのことが自分でできるようになったりしてほしい。また、クラスみんなが認め合えたり、助け合えたりできるような関係づくりをしていきたい。

〔工夫、アイデア〕

全体に向けて、1日のスケジュールを写真やイラストを使って視覚的に分かりやすく掲示。

F児に向けて、

- ・個別にスケジュールを作成。
- ・他の部屋に行くまでの動線をF児の好きな色のテープで矢印をつくる。

- ・活動の準備の際にはF児の物の写真を使ってお知らせ。
- ・年齢，その子どもに合わせた文字やイラストの表示を工夫。

3. 指導助言

グループ討議では，新しい様式のワークシートだったが，意見交換も活発に進んでいたように感じた。

今回参加してもらった先生に事前にアンケート調査を行い，特別支援を必要としている子どもを見ている先生が90%以上いた。年齢が高くなるほど，気になる子どもの姿が増えてくる傾向があった。アンケート調査では，活動参加が困難，落ち着きのなさ，伝えることが苦手，言葉の理解が苦手，伝えることが苦手という気になる姿が多かった。

障がい者差別解消法 平成25年制定，平成28年4月施工

全ての国民が障害によって分け隔てることなく，相互に人格と個性を尊重し合い，共生する社会を実現するために制定された。障害のある子どもに対する支援については，以下の2つがキーワードとなる。

基礎的環境整備…法令に基づき又は財政措置により，行政単位で行っていく必要があるもの

合理的配慮…基礎的環境整備をもとに，設置者及び学校が，各学校において，その状況に応じて提供。

障がい者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し，又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって，特定の場合において必要とされるものであり，かつ均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。基礎的環境整備をどこまで整えるかで合理的配慮と言われる部分の負担は軽減されることもある。

合理的配慮における平等性と公平性の考え方において，以前はみんな等しく平等にという考えだったが，最近ではそれぞれに必要な配慮を行うという考え方になり，同じ「スタートライン」にたつことが目的である。(不必要なゲタをはかせる必要もない。)

今回の発表の中で，園全体の基礎的環境整備として

- ・夏休みのお知らせ，スケジュール，明日の献立，三色栄養素，ホワイトボードのスケジュールは年齢が違って同じシンボルマークを使用。

個別の関わりとして

- ・本人の得意なこと好きなこと，苦手なことを押さえる。
- ・今回のワークシートが支援をしていく中で道筋として使うといい。

～グループワーク～

※ワークシートの記載にあたって

- ・個人の目標設定を具体的な行動を記載する。その際，この“行動”は回数でカウントできるもの，みんなイメージできるもので表現する。
(例)パニック…泣く，暴言，暴れる，動けなくなってしまう，笑うなど，捉え方は様々であるため，具体的な言葉で表現する。
- ・否定的な表現をしないで，前向きに肯定的な表現をする。
- ・教えたいことや目標設定が多くなるが，絞って目標をきめた方がいい。目標が多くなると，どっちつかずになってしまうため，その月々で目標を絞っていくといい。
- ・全体設定と個別の関わりは相互に関係し合っている。

・視覚支援を行う上でなくなることがステップアップではない。全体に掲示はしなくても、わからなくなった時にヒントを残し、「ここにあるから見に来てね」「ポケットに小さいのがあるよ」と形の変化をしていく。

※全体の環境設定をする際のポイントとして、

クラスに気になる子どもが複数いる場合、困った行動が起きた後の対応を決めておくことも大切だが、事前に困る行動が起きないようにするためにどうしたらいいのかを考えることが重要である。離室、かんしゃくになりやすいなどそれぞれの行動がどういう状況で起きるのか分析し、それが起きにくい全体設定をしていくことが大切である。

アメリカのノースカロライナ州で行われている TEACCH という支援システムがあり、その中で考案された“構造化”という考えが全体設定を行う上で以下の3点がヒントになるのではないかな。

- ① 場所の設定，場所のつくりをどうしていくか
- ② 時間の流れをどういう風にしていくか，どう伝えるか
例 朝の会で10の流れを5に変える
- ③ 視覚的な掲示物をどれだけクラスに置くか

○まとめ

- ・子どもと関わるときに，子どもの好きなことや得意なことを生かしていく。
- ・ひとりで抱え込まず，園全体で共通理解をして職員みんなで子どもをみていくことが大切である。